

# 三水会会報

北里大学海洋生命科学部  
同窓会会報 第 71 号

平成28年3月発行

編集者 内藤 文隆

発行 三水会(北里大学  
海洋生命科学部同窓会)

事務局 〒246-0031 神奈川県  
横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1

TEL フリーダイヤル  
0120-873-135

目次／三陸臨海教育研究センター	P.1	北里祭報告	P.5
北里大学同窓会講演会報告	P.2	就職ガイダンス	P.6
職場紹介	P.3	潜水部OB会	P.7
近況報告	P.4	お知らせ	P.8



—関連記事はP8をご覧ください—

## 第50回北里大学同窓会講演 会報告

三水会理事  
増田 孝文(18FA)

学園祭や大村智先生のノーベル賞受賞による華やかさのなか、11月7日13時から第50回北里大学同窓会講演会を相模原キャンパスMB号館大講義室で開催しました。北里大学同窓会鈴木達夫副会長から、大学創立50周年、研究所創立100周年の発展的状況の中、第50回同窓会講演会を迎えられたことを感謝する旨のご挨拶をいただきました。

講演は、NPO法人三陸ボランティアダイバーズ代表の佐藤寛志氏の「東日本大震災からの復興支援活動―越喜来湾の海から見た再生―」から始まりました。

三陸ボランティアダイバーズは、震災後に三陸海岸で復興支援をしている団体として、北里OBや世界のボランティアの方々が増加しているグループです。すでに4tトラック何百台分ものガレキを撤去しており、この活動は世界に広く紹介されています。また、最近では養殖再開の手伝いも行っているとのこと。この復興の様子は写真やスライドで拝見しましたが、言葉を失うほどの被害状

況、地道な活動、その成果を正直に伝えてくれる映像でした。

現在でも海の中に大きなケーンは転がったままですが、アイナメの産卵、イワシの群泳、サケの遡上産卵が再開し、生き物は確実に戻ってきているとのこと。また、マンボウなど私達にとつて懐かしい魚が定置網に揚がる様子、ホタテやワカメ養殖を再開した活気ある港の様子も紹介されました。

三陸の将来を見据えた活動では、観光資源を利用した「グリーンツーリズム」の開発として、越喜来湾クルーズ、ワカメ養殖体験、サケ遡上の観察を行う「サーモンスイム」を始められています。スマートフォンを直接見た佐藤氏は、住民が現地に残って懸命に復興し、現在ではリゾート地と



佐藤寛志氏の講演

して再生している様子も紹介してくれました。三陸においてもスマトラ同様に、海岸線をいじらない再生を期待していると述べられました。

講演は「今後、北里大学の皆さんの技をもって、一歩踏み出していたければ新しい道がひらかれると思います。越喜来湾に皆さんのお力をお借りできればうれしいと思います。」との言葉で締めくくられました。

次いで、三國清三氏から「三國の食育について―味覚は心と気持ち豊かにする―」をテーマにご講演いただきました。三國氏は洋食料理家としてホテル・ドゥ・ミクニのオーナーシェフを務めておられます。

三國氏は、北海道の増毛町に生まれ、幼少期は貧しく、海岸に打ち上げられたホヤも食べていたそうです。しかし、ホヤは甘味、酸味、塩味、苦味の四味をもち、特に苦味があることで、三國氏は子供の頃に味覚を育てることができたとしています。その後、米屋に住込みで働き、食事で出されたハンバーグに感動とひらめきを得て料理人の世界に入り、わずか18歳で帝国ホテルに勤めることになった努力の人です。

「三國の食育」とは、子供を通



三國清三氏の講演

して大人社会に永遠に訴え続けていくことであると述べています。

近年の親子同士が傷つけあう世の中は感性が育っていないことが要因であるとして、味覚を育て保護する活動を始めました。味には四味と日本で名づけられたうま味の五味があります。味を感じる味蕾は8歳から12歳にかけて増加し脳の成長に寄与します。五味の成長により子供たちは脳を刺激され、五感が豊かに育つとしています。ここで現代の野菜が真っ直ぐで虫食いが無いのはなぜかと問われました。野菜は太陽に向かって伸びていくから曲がりませんし、虫は美味しい野菜につくことが当然のこと、棘のないナスがなぜ虫に食われないのか。味蕾は天然のものしか受け付けない、つまり、本物の味を知ってほしいと述べられ

ました。

日本の食育は1999年頃から活発化しました。ご自身はすでに1985年から本格的にスタートし、子供たちを対象としたシェフコンテストを通じた食育をご紹介いただきました。イタリアやフランスでも活動を広げておられ、フランスでの味覚授業は国を挙げて実施されているとのことでした。

三國氏は東京ブランドアンバサダーとして、食の大切さから、東京オリンピックでは地産地消を基本として、江戸前野菜を提供していきたくいと抱負を述べられました。

今回の講演会には約150名のご参加をいただきました。卒業生、在学生、教職員の方々、特に相模原市民の皆様の参加は本当に嬉しく、また盛況のうちに終えることができました。高橋会長の挨拶にありましたが、講師の方々の直接の行動に基づく圧倒された力強い内容は、三陸の現状と将来について自分なりに見つめ直すとともに、味覚をとおして自然と食の重要性を問われていると感じるものでした。

最後に開催にあたり全面的にご協力いただきました北里大学、北里大学同窓会、そして各学部同窓会各位に心より感謝いたします。

### 「水産資源の持続を目指して」

水産庁九州漁業長事務所資源課  
資源管理係長

宮沢 哲 (29FF)

私は水産行政に携わっており、仕事柄異動が多く、これまで漁業取締り、日露漁業交渉、生物多様性に関する調査・研究などに関わってきましたが、昨年4月から九州で資源管理を担当しているので、現職の職務内容について簡単にご紹介したいと思います。

私の職場（九州漁業調整事務所）は博多港内にあり、マリンメッセ福岡と国際フェリーターミナル（博多―釜山）に挟まれた博多港湾合同庁舎内にあります。マリンメッセ福岡ではよくコンサートが行われるのですが、個性豊かなファンが長蛇の列をなしている光景には圧倒されます。また、対岸には博多ポートタワーが望め、日中、夕方、夜と異なるベイサイドの景色は素晴らしく、先日の大寒波もたらした雪景色のベイサイドも普段と違って趣がありました。職場の組織的な位置づけは水産庁の地方支分部局となっており、管轄区域は九州・山口県の地先海面で、所掌事務は漁業取締り、漁業調整や資源管理などを扱っております。私は主に、九州山口北西海域ト

ラフグ広域資源管理、有明海ガザミ広域資源管理、南西諸島海域マチ類※広域資源管理を担当しております。これらの魚種は県の区域を超えて広域的に分布回遊するため複数県で漁獲対象となることから、国、関係県及び関係漁業者で協議を行い、広域資源管理方針を作成して資源管理に取り組んでおります。

管理内容は以下のとおりです。

①九州山口北西海域トラフグの主な産卵場は有明海と瀬戸内海とされており、仔稚魚は成長につれて外海に移動し、産卵のため再び産卵海域へ戻って産卵をします。外海に出た親魚又は外海に出る前の未成魚を獲り尽くしては次世代を残すことはできません。そこで、外海（玄界灘や対馬沖など）の漁業者は親魚資源を残すために漁獲サイズを制限したり、休漁期間を設けたりと資源管理に取り組んでおり、内海（有明海）では関係県が地元漁業者の協力を得ながら適地、適正サイズの種苗放流を行います。資源の培養に努めております。

②有明海のカザミについては抱卵ガニの再放流や漁獲サイズの制限、産卵期の一定期間すくい網による採捕を禁止しており、実際、漁業取締船に乗船して有明海の監視活動も行います。

③南西諸島マチ類については鹿児島県と沖縄県がそれぞれの海域に保護区（周年または期間を定めた禁漁区）を設定し資源保護に努めております。適切な資源管理を行い資源回復を目指す取組ですが、一方で漁業者の漁獲努力を抑えるため漁業経営においては不利になります。そのため、長い目で見て持続的に資源が利用できるよう関係者間による意識の統一、十分な話し合い、そして協力が不可欠となります。私自身、様々な場を活用して漁業者や県の担当者及び研究者の方からの意見を聞くことに心がけており、今ある水産資源が食卓や飲食店から姿を消さないよう努めて行きたいと思っております。

業務内容の詳細については、水産庁のHPから「資源管理の部屋」↓「広域漁業調整委員会」を参照いただくことにして、後半は、学生時代の思い出について話したいと思えます。増殖学研究室で4年生だった私は、卒論でウナギの研究を行うことになりました。飼育環境の異なる個体間の観察を行うもので、研究室の仲間の協力も得ながら3つの飼育装置を組み立てて飼育を開始しました。飼育・観察ともに順調に進み、12月に入ったころ学芸

員養成課程を履修していた私は学芸員実習のため、研究室の仲間に留守中の世話を依頼して、一時的に三陸を離れることになりました。「美ら海水族館」での実習生活は南国の景色に囲まれる中、イルカやマナティへの餌やりなど、すべてが新鮮で充実した日々を送っております。

数日が経って卒論のことなどすっかり忘れ、いつものように心弾ませて水族館に向かっていたとき、研究室の仲間から電話が入りました。用件を聞くと、水温を調節する装置の故障により、私の飼育水槽が沸騰しており、稚ウナギが茹で上がっているとのこと。頭の中は真っ白になり、一気に天国から地獄へ突き落とされてしまいました。沸騰？茹でウナギ？留年確定！その日一日、その言葉が頭から離れずイルカもマナティも稚ガメ達を見ても癒されませんでした。そんなこんなありましたが何とか卒業させていただき、今日の私があるのも、当時の先生そして研究室の皆さんのおかげであり感謝しております。



最後に、先生、諸先輩方々そして同期の皆様、仕事やプライベートで大変

お世話になっております。この場をお借りて厚く御礼申し上げます。※マチ類とは、沖縄で使われている通称で、フエダイ科(約17種)、ムツ科(2種)、ハチビキ科(3種)の全22種の総称で、当該資源管理ではハマダイ、アオダイ、オオヒメ、ヒメダイの4種が対象となっております。

### 水族増殖学研究室の近況報告

准教授 吉永 龍起

水族増殖学研究室は、千葉洋明准教授と私の2名体制で運営しています。自然に恵まれた三陸からは離れましたが、私の研究活動はむしろ野外調査が多くなりました。相模原に移った当初、研究所の場所や材料を確保するために大学院時代の恩師や仲間にお世話になりました。恩師はウナギ研究の第一人者ですので、必然的にウナギを対象とした研究が増えました。



最初に始めたのはシラスウナギの採集調査です。ニホンウナギの人工種苗生産

は試験的に成功していますが、まだ今のところ事業化の目処は立っていません。したがって、海で生まれて河口に接岸するシラスウナギを養殖池で大きくするのがウナギの養殖です。一方、シラスウナギの漁獲量が激減し、不漁年にはシラスウナギの価格が500円近くまで高騰します。

ニホンウナギは古来より日本人が食べてきた重要な水産資源です。また、蒲焼は江戸時代から続く重要な食文化です。ニホンウナギを保全しつつ、かつ食料として利用するためには、漁獲可能な量を決める必要があります。一方、シラスウナギの漁獲量は信頼できるデータがなく、そもそもどのくらい減ったのかすら曖昧でした。そこで、周年にわたって河口に接岸するシラスウナギの量を調べています。調査は毎月の新月前の深夜で、2時間にわたって水面をライトで照らしてシラスウナギを採集します。冬季の調査は非常に過酷で、とにかく寒いですが、でも学生たちはとても元気で、熱心に調査してくれます。また、強力な

助っ人がいます。水族病理学研究室の筒井先生と水族生理学研究室の阿見弥先生です。たっぷりの愛情に大量のニンニクやマヨネーズを添えた温かい手料理で、調査を

サポートしてくれています。

河川の生態調査も行っています。胴長を着て川に入って、電気ショッカーを使って採集します。体長などを調べてから放流する調査を毎月行つて、ニホンウナギが好む場所を調べてきました。これまで、シラスウナギが海からどのような川に定着するのかわはよく分かっていなかったのですが、その生態や成長率などが明らかになりました。また、私達の生活用水を確保するための取水堰がニホンウナギの生息場所を制限していることも分かりました。そこで、私達の便利な生活を保ちつつ、ニホンウナギの生息場所を確保するための保全策を考えました。ニホンウナギを保護できるか、机上の空論に終わるか、の検証はこれからです。

熱帯のウナギも研究しています。ウナギは世界で19種・亜種が知られており、うち2/3は東南アジアに分布しています。これまでに食用としてきた日本やヨーロッパのウナギが激減したため、熱帯のウナギが養殖に使われるようになってきました。しかし、熱帯種の生態はほとんど分かっておらず、やみくもに漁獲すると絶滅に追い込んでしまう危険があります。したがって、熱帯のウナギを

保全することは、日本の責務であると考えられています。一方で研究費は限られており、国外への生物の持ち出しにも制限があるため、東南アジアのウナギを調査するのは難しい面もあります。ところが、いろいろと運にも恵まれて、合法的にフィリピンとインドネシアのウナギを集めることができました。

ウナギ属の本場である熱帯では、同じ場所でも様々な種のウナギが接岸することが分かりました。また、季節によって接岸する種が異なることも分かりました。このことは、養殖の対象種のみを漁獲することが難しいことを意味します。熱帯種を利用することは、数年程度をしのぐには有効かもしれませんが、長期的な事業にはならないと私は考えています。ニホンウナギの資源を回復させて、そして持続的に利用することが、和食という国際的にも評価された食文化の価値を維持に重要でしょう。

相模原に移転した2011年度は、なんとか卒論の研究課題を作るのに必死でした。この時に苦し紛れに始めたウナギの蒲焼のDNA検査は、今では一般メディア等にも取り上げられるようになりました。学術的な調査ではなく、あ

まり自慢できるようなものではありませんが、研究と社会の接点として今後も続けていきたいと考えています。この調査を経験した卒業生からは、「あそこに怪しい蒲焼があった」など報告が来ることもあります。いつでも大歓迎ですので、お近くの珍品情報をお知らせください。

ワムシの研究ももちろん続けています。今年の卒論では、長年調べてきた物質がアンチエイジングのサプリメントとして有効な可能性を見出しました。また、昨年からは始めたイカナゴの研究では、三陸沿岸には隠蔽種がいることを発見しました。残念ながら新種の記載は他のグループに先を越されてしまいました。イカナゴの不思議な生態の解明に取り組んでいます。そんなこんなで、元気にやります。ぜひ遊びに来て下さい。

## 北里祭参加の報告

海洋生命科学部北里会  
執行委員会 奥津 一真

11月7日および8日、相模原キャンパスにて北里祭が開催されました。

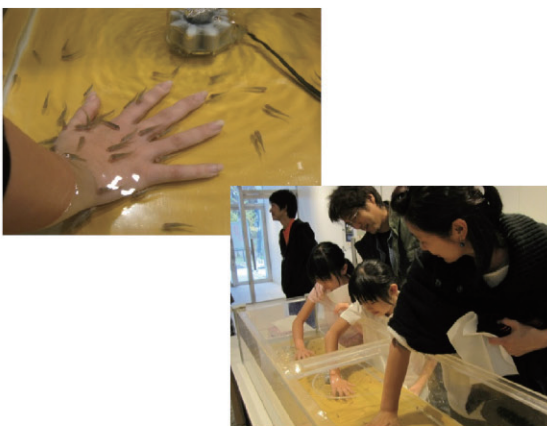
秋の肌寒さを感じられ、二日目には雨が降るなどあまり天候には恵まれませんでしたが、北里祭は両日ともに大盛況となりました。執行委員会では毎年炭火焼きサンの販売を行ってきました。しかし、今年度は他団体の活動にも参加しているメンバーが多く、人手不足で販売が難しいと考え、新たな試みとしてドクターフィッシュの体験を企画しました。

ドクターフィッシュとはガラ・ルファというコイ科の魚の通称であり、ヒトの古くなった角質を食べてくれることで有名な魚です。実際に体験された多くの方々から「楽しかった」とお褒めの言葉を頂き、たくさん笑顔を見ることが出来ました。また、各年齢層の方が楽しんでくれたこと、まだ小学生にも満たないような小さな子供たちが魚に興味を持ってくれたことに、自分たちは充実感とやりがいを感じました。しかし、サンマを楽しみにしていたという声もいくつかあり、こういったニーズ

にどう応えていくかが来年度の課題であると考えています。

今年度の北里祭には海洋生命科学部北里会から5つの団体が参加をしました。どの団体も大変の賑わいをみせており、漁火サークルのイカの炭火焼きも定着した様子でした。来年度はもっと多くの団体に参加していただき、海洋生命科学部北里会が北里祭を盛り上げていきたいと思っています。

最後になりましたが、今回は、三水会の皆様のご支援により北里祭に参加することができました。ありがとうございます。心より感謝申し上げます。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願いいたします。



## 2015年就職ガイダンスに参加して

水産増殖学科23期生

北吉 直子

学生が就職への意欲や、仕事への興味を継続的に持ち、就職活動することは難しい。また、職種や業界を理解する事も難しい。企業のニーズや社会人としての価値観もよくわからないだろう。この事は、就職ガイダンスに参加するたびに思うことである。

学生達は年々入学時の偏差値が高くなっており、この事は学校にとって喜ばしいことである。しかしその一方で、水産関係の仕事への興味が薄らいでいる現状が見え隠れする。「給料が安い」、「労働がきつい」など様々な要素が、高い学力を持つ彼らには魅力的に見えないようである。また、水産関係の仕事が一般的でなく、「よくわからないから嫌だ」という声も聞かれた。就職すればどこでも大変で、悩みや喜びがある事を彼らは知らない。

一般的に今の学生は安定が好きで、「仕事内容がよくわからないうえに給料も安く拘束時間も長い」そんな職場よりメジャーで給料もそこそこ、休みもある大手の企業が魅力的なのだ。ところが大手企業なんてものは、たいがいブラックな部分があるもので、「こんな会社だと思わなかった」と言って1年もすれば辞めてしまう。そこから転職スパイラルに巻き込まれてしまう若者が多くいる。今の世の中、ベテラン社会人が彼らに伝えなくてはならない事は何か、学校が行うべき職業訓練

は何か、迷走状態である。私のように就職関係の仕事をしているとよくこの問題にぶちあたる。さて北里はというと、三陸に学校があった時には自然と身に付き、理解が進んだ事が、相模原ではできない。いくらもう「水産学部」ではないとしても、水産業界の仕事は知っておくべきなのではないだろうか。たとえ、水産関係の仕事をしなくても、水産関係の仕事をしなくては知っておいた方がいいのではないだろうか。この先、三陸というブランドを捨て、都会の大学として「三陸」ではない何かを見出すのか、どうなるのであるうか。ガイダンスに行くたび、なんだか疑問と不安が渦巻く。時が移ろいゆく中で、学校も変わっていくのは必然なのであるが、あまりの価値観の変化に驚いてしまう。「あの三陸にある学校ね」という価値はどうなるのか。昔はよかったなどとは言いたくないが、三陸を知らない学生を目前にする戸惑ってしまう。



MB35: 佐藤華奈子講師 (株)ヤオコー



FF29: 大内豊講師 新江ノ島水族館飼育員



FA23: 北吉直子講師 教育ネットワーク

まあ、今にして思えば私の学年は新人類と呼ばれた学年で、女子も多く、先生方に「服装が変わった学年」と言われたことを思い出して学校に行き、ある教授に「どこへ行くの」と朝呼び止められも

した。学生の価値観の変化は何時どこでも起こりうるのかもしれない。周りの大人はそのたびに驚くものなのかもしれない。今の変化についていけないのは当然と考えるべきなのかもしれない。学生と触れ合ういつも新鮮な発見がある。こんな風に感じるなんて、私も年を取ったということか。



## 北里大学海洋生命科学部潜水部 OB・現役懇親会に参加して

水産学部 第五期 井上 衆

二〇一五年十月二十四日土曜日、集合時間と聞かされた午後一時に間に合うべく相模大野駅発のバスに乗り込んだ。去ること九月末、潜水部後輩の越川君からOBと現役学生との懇親バーベキュー会の案内を頂いており、それに参加するためである。

相模大野訪問は、大学一年の相模原キャンパスに通学していた頃以来であり、実に三十八年振りだ。これだけ時間が経つと当時の街並みの記憶すらなく、初めて訪問する郊外の町の感であった。バスの車窓からの風景も当初は見覚えのないものであったが、麻溝台の信号を過ぎたあたりから、道路の両側に緑が広がり、やっと通学していた当時の懐かしい景色が甦ってきた。ところが到着した大学の様子は当時とは大きく様変わりしていた。思っていたよりも広大で相模原キャンパスも変貌しており、学内の案内図から辛うじて海洋生命科学部校舎にたどり着くことが出来た。

バーベキュー会場は学部校舎近くで、ちょうど食材や飲物を後輩たちが運び込んでいるところであった。会場の来場名簿には五期

の小生より先輩もご参加の様子であった。

その後乾杯の音頭でビール、焼酎と進み、現役生調理のバーベキューに舌鼓を打ちつつ後輩と話を進める内に、小生と同時期に三陸キャンパスで学んだK君、卒業後八丈島で一緒にダイビングしたT君をはじめ、多くの後輩と懐かしい話が出来た。また相模原にキャンパスを移してから後輩、現役生からの話では潜水トレーニングが月一回、伊豆等への遠征でしか行えない現状を聞き、三陸での毎週土曜、日曜の潜水トレーニングと海に隣接した環境を羨ましがられた。

会場では名札代わりに梱包用のテープで名前と入学期、部内での役職を書いて張っていたが、小生の「潜トレ」に対し後輩からそれは何かと質問された。当時は三年生の潜水トレーナー＝潜トレが



練習メニューを作り、部内で後輩を指導してスキューバまで行っていたことを伝えると後輩から驚かれもした。

また小生の

現役の頃は学校にコンプレッサーが無く、漁協でエアチャージをしていたが、それが年々モノで、百気圧程度しかチャージ出来なく、それで潜っていたことなどを話し、呆れられた。

今年に残念ながら台風の影響で中止になったそうだが、小生が現役の時に初めた夏合宿が、当初は三宅島での開催を八丈島に移して継続していることを聞き、嬉しい思いもした。また今夏は潜水部五期五名と十数年振りにスキューバダイビングをしたが、その時一緒に潜ったK君とも再会した。料理もOB差し入れのマグロをホイル焼きしたもの、練製品のあぶり焼き等々と続き、さらにアルコールが進むこととなった。そして楽しい時間はあっという間に過ぎ、辺りが暗くなる頃、集合写真撮影の後、水産放浪歌を熱唱しお開きとなった。

当日はOBの参加が十七名(内潜水部以外のOBが五名)現役学生の参加が八名の総勢二十五名で、その他に小生と同期の三水会長でもある高橋明義教授に監督役をお願いし、御出席頂いた。

また今回は井田齊先生、潜水部顧問の朝日田卓教授は調査で欠席とのことであった。

後日であるが会の一週間後の十



月三十一日土曜日に、NHKで三陸復興のTV番組があり、朝日田教授の震災後の越喜来湾資源調査の様子が報道されていた。大変感慨深い映像であった。

二〇一五年は、我が北里大学の 大村 智特別荣誉教授がノーベル生理学・医学賞を受賞する記念すべき年となった。バーベキュー会は来年も継続だそうだ。海洋生命科学部は未曾有の災害の影響もあつて相模原にキャンパスを移したが、学部の未来を託す後輩たちに先輩の志を伝えるべく来年は更に多くのOBの参加を期待し、幹事でご苦勞をおかけした越川成二君、当日活躍の現役生に感謝しつつ筆を置く。

## ■ 三陸臨海教育研究センター利用について

2011年3月11日に発生した東日本大震災の煽りを受けて、海洋生命科学部は、相模原キャンパスへの移転を余儀なくされました。移転後直ちに新校舎の建築が始まり、翌年7月には相模原キャンパスMB号館が竣工いたしました。これにともない、2013年4月には海洋生命科学部および大学院は相模原キャンパスを主たる拠点とすることになり、現在に至っております。

一方、2014年4月には、三陸キャンパスを「三陸臨海教育研究センター」(SERC)と称し、教育、研究施設として活用していくことになりました。震災の被害を受けたF1～F3号館は2015年7月までに解体撤去いたしました。旧F4号館とMB5号館、そして図書館が利用されることになります。

水産学部発足以前より長年、「管理棟」の愛称で親しまれ、今では信じられない部活の想像を絶するコンパなどで数々の思い出を残してくれた三陸研修所は2015年7月、半世紀近くに及んだ利用を停止しました。三陸臨海教育研究センターには講義、実習施設に加え宿泊設備も備えられております。**北里大学卒業生は一人、一泊2食付き4,100円で利用できます**ので、友人やご家族との旅行などにもご活用ください。詳細は北里大学HP海洋生命科学部にてご覧ください。

## ■ 平成28年度三水会定期総会のご案内

下記により平成28年度三水会定期総会を開催します。

理事、代議員はもとより一般会員も傍聴できますのでご参加ください。

開催日時：平成28年5月21日(土)午後5時～(受付4時30分)

開催場所：北里大学白金キャンパス 薬学部1号館4階1402教室

(注)：開催場所は大学の都合により変更される場合がありますので、ご参加の方は事務局までご確認ください。

- 議 事：1. 平成27年度事業報告及び収支決算報告  
2. 平成28年度事業計画及び収支予算  
3. その他

### 三水会会員の皆様へ

新住所の登録や住所変更の手続きが下記にて出来るようになりましたのでご利用ください。

**次の方法にて変更願います。**

1. パソコンから：北里大学同窓会ホームページのトップページの「会員登録データの変更について」  
<https://business.form-mailer.jp/fms/43980d3846101>
2. スマホから：右のQRコード  
<https://business.form-mailer.jp/fms/43980d3846101>
3. そ の 他：(1) 北里大学同窓会会報同封の会員登録データハガキ  
(2) FAX：03-3444-3369



\*お問い合わせ先：北里大学同窓会事務局 TEL：03-3446-7309

## 編集後記

暖冬と言われた今年の冬ですが、都心では大雪の影響で交通機関が麻痺するなど都市部の脆弱性が問題となりました。さらに西日本や九州などあまり雪に縁の無い地方でも雪の被害や寒波による水道の凍結、断水といった被害が出ているようです。三水会会員の皆様の中にも被害を受けた方がいらっしゃればこの場を借りてお見舞い申し上げます。

毎年予想外の気象状況による被害が絶えませんが、さらに国際状況の不安定化とそれに伴う国内経済の停滞などなかなか明るい話題に乏しい中、昨年の大村特別栄誉教授のノーベル賞受賞はとてうれしいニュースでした。大学としてのさらなる発展と会員の皆様のご活躍を願っております。また、去年は相模原キャンパスにて全学同窓会講演会を三水会として催行し、多くの方にお集まりいただきました。大きく変化したキャンパスに驚かれた方も多いと思います。なお、三陸キャンパスは震災後改修を受けて、三陸臨海教育研究センターとして昨年夏オープンしました。宿泊施設もできたようですので訪れてみてはいかがでしょうか。今後とも卒業生の親睦を強め相互に働きかけができる会として三水会が発展できるよう皆様のご協力をお願いいたします。